

研究室紹介

和歌山県果樹試験場うめ研究所

和歌山県はウメの栽培面積 5,270 ha、収穫量 61,000 t で（令和 5 年農林水産統計）、いずれも全国で 1 位となっています。県内のウメの主要産地は県の南側に位置するみなべ町および田辺市で、古くから栽培が行われてきました。主要品種の「南高」は豊産性で、果肉が柔らかく主に梅干に加工されています。「南高」は県内で栽培されているウメ品種の約 8 割の栽培面積を占めており、和歌山県を代表するブランド品種となっています。

和歌山県果樹試験場うめ研究所は、2004 年（平成 16 年）4 月に、ウメ産地の農家の強い要望を受け、旧南部川村（現在：みなべ町）に設置されました。当研究所は県内に 3 箇所ある果樹関係の試験研究機関のうちのひとつで、日本で唯一のウメに特化した試験研究を行っています。現在 10 名の研究員が配置されており、そのうち 3 名が病害虫に関する業務を担当しています。以下に、病害虫防除試験の概要を紹介します。

1 かいよう病の防除技術の開発

マイコシールドはウメかいよう病菌に卓効を示すため、長年にわたり生育期に連続散布されており、耐性菌の発生が懸念されています。そこで、マイコシールドの散布回数削減を目的に、代替剤の探索や新たな防除体系の確立に取り組んでいます。

2 ドローンによる省力的な薬剤防除技術の開発

傾斜地園地が多い本県のウメ産地では、ドローンによる農薬散布技術は利用価値が高いと考えられます。そこで、ドローン散布による殺菌剤の防除効果の検討に取り



図-1 ドローン防除試験

組んでいます。

3 クビアカツヤカミキリの防除対策

クビアカツヤカミキリは、幼虫がウメ、モモ、スモモの樹内部を食害します。著しく食害を受けると樹が枯死する可能性がある重要害虫です。県北部では 2019 年からウメに被害が確認されていましたが、2023 年にウメ主産地に近い県中部でも確認され、産地の危機感が高まっています。そこで、有効薬剤の探索、物理的防除技術の確立に取り組んでいます。



図-2 クビアカツヤカミキリ成虫（左）と食害により排出されたフラス（右）

4 モモヒメヨコバイの防除対策

本県では、2019 年に田辺市のウメ園で初めて被害が確認され、現在ではウメ主産地のほぼ全域に被害が拡大しています。モモヒメヨコバイは 2021 年に和名が付けられた新しい害虫です。そのため、発生生態に不明な点が多く、防除薬剤も明らかになっていませんでした。そこで、発消長や越冬生態の調査、有効薬剤の探索を行っています。



図-3 モモヒメヨコバイ成虫（左）と幼虫（右）